

## 学会記録

### 故矢野先生追悼文

前会長矢野先生が、昭和46年8月23日、肺癌にて召天されてから一年になります。命日に先だつ8月20日には池袋本教寺において一周忌の法事がとりおこなわれ、学会からも3名の代表者が参列いたしました。

ここにあらためて先生のご冥福を祈り、かつご遺族のご平安を念じ、会員各位よりの追悼文と、先生が、ご生前親交をもたれた方々の特別寄稿をお願いしたものをあわせてここに集録いたします。

---

### 矢野剛君を偲ぶ

鈴木雅次

矢野君がお亡くなりになってから、既に一年が過ぎたが、今でも、微笑をたたえた君の温顔が目先に浮んでくる。

思うに、学界等で一般に交通経済学を研究する人は多いが、複雑難解な港湾経済の研究に、昭和の初期以来一生涯を捧げられた君の如き人は、斯界稀れで全てその道の先駆者とあがむべきである。

君は、当時私も関係していた日本港湾協会において、或はまた各大学および港湾経済学界にあって、なに人よりも早くから、わが国の港湾は、既に盛んであった修築とともに新に経営の方面における研究にも、全力を挙ぐべきだと強く主張された唯一の人であったと記憶する。例えば港湾法の中には、管理という字句はあるが、経営の字句は一つも見当たらないのはけしからんと、慨嘆されたことも想起す。

君の沢山の港湾に関する著書論文のなかで特に港湾企業の公共性、経営主体の自主性、独立採算性の採用などを力説されているのが印象深い。

君は、大正五年早稲田大学の商科卒業後直ちに日本郵船に入社、六ヶ年海運の実務につかれた。その実務の経験こそ、後年君がこの道の学者としての大をなす契機とな

り、また素因として、大に役立ったことと思う。それから一ケ年米国に留学して帰国後、九ケ年に亘り法政大学の講師と、我が日本港湾協会の囑託を兼務し、種々優秀なる研究論文を発表された。その後日本海事振興会に二十一ケ年つとめ、早稲田大学講師、城西大学教授を経て、昭和三十七年日本港湾経済学会が創設さるや衆望をになつて、その初代会長に就任された。

君の所論は、前記の期間中における経験と研究とから創り出されたもので、外国文献のみの羅列に終るものに比べると、その趣を殊に異にする所が多かった。元来日本の港湾学は、ヒジカルの面において、早くより諸外国のマンネリを脱して、わが国状に適した独自の発達をなしていたが、経済学の方面からの追求は、矢野君が始めてであり、また当時の外国の文献においても見るべきものが無かったため、君のこの分野における論説は、常に前人未踏の新鮮なるものとして、我が協会雑誌「港湾」をにぎわし、技術方面の人々からも高く評価されていた。

昭和三十九年発行された「港湾経済の研究」は君がそれまでの多年にわたるパイオニアの努力の成果が結集された金字塔を意味する記念すべき名著であったばかりでなく、更にわが国港湾界における今後の経済的運営発展に対し多大の貢献をなすものと思ひ私もその序文としての拙文を以て、君の学界における効績をたたえと共に、実務にあたる人々に対し、広くその熟読を推薦したことがあった。

以上のような永年のご功績により、昭和四十四年十一月には、交通文化章の榮譽を受けられたのも宜なるかなと君を知る一人として、一層追憶にかられるのである。

## 矢野剛君を憶う

島 田 孝 一

畏友矢野剛君が先頃なくなられたことは、吾々交通問題に深い関心と興味をいただきながら研究に従事するものにとっては、大きな悲しみである。私は大正時代の初期以来、同君の知を辱うした関係があつてから、数えてみれば凡そ半世紀以上にも及ぶ久しいおつきあいが継続したことになる。

私が矢野君をはじめて知つたのは、早稲田大学に入学して間もなくのことであつた。当時の早稲田大学には、現在の早稲田高等学院にあたるものとして大学予科があ

り、また今日の各学部該当するものとして大学本科が設けられていた。矢野君も私と共に学部商科の学生であったが、同君は私より一年先輩であった。矢野君のクラスには、現在の高橋経済研究所の高橋亀吉君とか、既に故人になったが金融論ならびに統計学の権威であった小林新君など、多くの秀才がおられたが、矢野君もまたこれらの諸君と共に英才の一人として、学生時代から目ざましい活躍しておられたのである。当時学内には既に早稲田大学経済学会なるものが設立されており、会員は随時自らの研究の結果を発表し、またこれに対して会員が相互に意見を述べたり、討論を行ったりするのがならわしであったが、矢野、高橋、小林の三君は、常に会員中のリーダー格であって、吾ら下のクラスのことを指導する立場にあったのを忘れることは出来ない。

矢野君と私とを結びつけたもう一つの契機は、大学時代を通じて、共に交通の研究に主力を置いたことであった。当時の早稲田大学の学部商科においては、恐らく他の大学より稍早く、交通経済学のゼミナールを設けていたのであって、このゼミナールの中心は、今はなき故伊藤重治郎先生であった。矢野君も私も共に伊藤門下の学生であったから、相互の間に一層親しさが増したのは、必ずしも偶然ではなかったのである。御承知の通り伊藤先生は、極めて厳格な教育方針をもって学生の指導にのぞまれる方であったから、吾々伊藤ゼミナールに属したものは、ただ漫然と教室に出ればよいというわけには行かなかった。時にはかなり難解な原書の翻訳を命ぜられたり、あるいは討論の際に準備不足のために、手きびしく先生のおしかりを受けることもなかったわけではないが、世にいう「良薬は口に苦し」の譬の通り、伊藤先生にきたえられたことが、後年どれ程私のためになったか、測り知るべからざるものがあったと信ずるのであるが、同じ伊藤ゼミナールの学生であった矢野君もまた、この点は同様であったろうと思われるのである。

矢野君は大正五年に早稲田大学を卒業され、ただちに日本郵船株式会社に就職され、永年にわたってわが国の海運事業の経営に専念されたのは周知の通りであるが、同時に早くから「船荷証券の研究」「備船契約の研究」等、極めて充実した著書を公にしておられることからしても、同君が単に海運経営の実務にたずさわったばかりでなく海運に関する多くの問題に関して、学問研究の立場から、不断の努力を継続されていた事実は、何人もこれを認めなければならないし、また晩年に至るまで、多くの大学の教壇に立って、若い学生諸君の指導につくされた努力もまた、決して忘れられてはならないのである。このような意味からしても、矢野君がなくなられたことは、真に

遺憾の極みである。私はここに謹んで同君の御冥福を哀心より御祈り申上げる次第である。

## 矢野剛先生の著書「商港論」

—矢野さんの追憶—

黒田 静夫

昭和の初め港湾経済に関する2冊の著書が刊行された。1つは矢野剛先生の「商港論」(叡松堂 A5判426頁)、他の1つは山本五郎先生の「港湾経済」(倉友社 A5判382頁)である。

この年代に交通経済学として港湾の問題を研究してこれを専門に論ずる学究はまことに少かった。海運界(日本郵船株式会社)の出身で実務の経験の豊富な矢野先生が当時法政大学に教鞭をとりながら執筆した「商港論」(昭和6年)は、港湾を陸上輸送の接点として中立的に論じたわが国最初の学術的著述で欧米先進国の港湾問題をスプロールした価値の高い著書である。

この翌年関西で倉庫業界(住友倉庫株式会社)に勤め、のちに大阪商科大学等の講師となった山本五郎先生が倉庫及倉庫業に焦点をあてながら「港湾経済」を刊行された。

関東の矢野さんも関西の山本さんも共に民間会社の出身で大学の先生となった在野の篤学者で、時を同じうして港湾経済学に関する著書を啓蒙的に発刊された努力と熱意に敬意を表する。2冊の著書は終戦後改訂増補版が出ている名著であることなどその共通点に関心をもたれる。私はこの2冊の本を今も大切に書架に保管して時にお二人の業績を追憶している。

矢野さんは戦後早稲田大学講師に就任し、この著書のほかに主として港湾の経済に関して10に達する著書を著わし、109を超える論文を学界業界の専門誌に発表するなど、学究として息の長い精進には深く教えられるところがあり敬服している。

終戦後昭和30年から37年の間、四谷にあった日本港湾協会の古びた屋舎で数回お会いしたが温和な人柄で、のちに日本港湾経済学会初代会長に就任されたのも矢野さんの人徳と学識の致すところである。また御本人はこの仕事に生甲斐があるといつも云っておったといわれ全力を傾注して職責を果し、鳩杖の賀を迎え天寿と全うしたことに深い感懐を覚えるのである。

## 矢野先生を憶う

佐 藤 肇

矢野先生が逝かれてからもう1年の月日が流れた。終始野にあって港湾の学的研究に一生を捧げられた先生の聖なる御姿が眼前に浮んでくる。生前に親しく教えを受けたものではないが、今、北見先生から御手紙をいただいて一言思い出を綴ってみたいと思う。

僕が先生にはじめてお目にかかったのは戦後である。先生の有名な著書「商港論」は戦前どこの本屋の書棚にも容易に見出すことが出来た。また雑誌「港湾」のバック・ナンバーを探している時には、ほとんど毎号といってよい程に先生の論文にお目にかかった。矢野剛というお名前は僕の頭に深く刻み込まれていた。戦後、新たに港湾法が発足した。港湾管理の問題が起こるたびに外国港湾の事情を知るには矢野先生の著書や論文に求めるより外はなかったように記憶している。しかし技術者の私には容易に理解されない言葉が並んでいて、どうしても外国の書物を読んでいるような苦痛が伴った。

確かに戦後間もない耐乏生活の頃であったろう。当時のまことに雑然たる役所の部屋の中で先生にお目にかかる機会を得た。その温顔と博学なる先生がわれわれのごとき後輩に対しても大変謙遜してお話をされることが深く印象づけられた。

先生が最後に港湾協会の私の部屋をお訪ね下さったのは何時のことであったろう。その時先生は「私ももう年であるから学会の仕事も続く後輩の方をお願いしたいと思っている」といわれ、学会活動の現状と将来についてもいろいろと述べておられた。私はその時、先生が日本における港湾管理の実状を大変もどかしく感じておられ、言外に慨歎の情が滲み出ているように感じると共に先生の意向しておられるのはロンドン港の管理形態ではないかと推測した。そして先生の学的活動は学問として勿論尊いものであるが、あくまでその成果が日本の港湾管理の近代化であり、それを御自分の眼で見たいという念願から発しているように思えたのである。

今にして思えば先生は当初日本郵船株式会社において海事関係の実務に従事しておられた。先生には実務家としての十分な見識が備わっていた。海事関係から港湾に興

味を持たれた先生にとって、企業主体としての港湾管理者が現在まで出現していないことは大変残念なことであって、昭和の初期にいわゆるポートオーソリテーターが日本に出現するような状況があったのであれば、先生は自らをポートオーソリテーターに投じてその海運と港湾に対する該博な知識を実践に移していたであろうと思はれるのである。

### 矢野先生を偲ぶ

栗 栖 義 明

矢野先生の赴報に接して、心からわが港湾界のための損失の大きさに思い致すと共に、先生の御遺族の御悲嘆の程御察し申しあげてから、早や一年経過しました。

先生の過去における港湾界に対する御功績或いは又、日本港湾経済学会長としての御活躍について述べることは、他に適当な方々が大勢あること故、ここでは、私なりに先野先生の思い出を記すこととしたいと思います。

私が大学を卒業して、内務省に奉職し、当時の横浜港修築事務所勤務を命ぜられましたのは、昭和16年4月の事で、爾来31年間、官界にあって港湾行政一途に歩んで参りまして、本年6月に運輸省港湾局長を最後に無事退官させて戴きました。

学校の土木工学科の教課の中で、港湾工学を修めたわけですが、学校を出たばかりの私には、専門の港湾技術は勿論の事、港湾そのものの認識については全くの白紙の状態、わが国の港湾の状況については先輩から種々御高説を頂き曲りなりにも知識を得ることが出来たわけですが、世界に通ずる海運の拠点としての港湾、言葉を変えれば海陸の結接点が港湾であると言われても、具体的には理解が容易でなく、港湾というものを、その機能なり、本来のあり方について包括的に如何にして的確に概念づけるか途方にくれていたと言っても過言ではありません。そのためにはいろいろな文献を漁り、当時二三あった外国のほん訳書等にも目を通していましたが、そのうち矢野先生の「商港論」に接し、この本によって、私の港湾に対する認識の第一歩が形成され、今日に至っているわけでありませぬ。

当時は、港湾建設技術については諸先輩の名著が相当数あり、自分の専門でもある事ゆえ、直接外国の図書館に接する機会には事かかなかったわけですが、港湾の管理、

経営と云った部門については全く矢野先生のみには教えられたわけですが、勿論、先生の御人柄なり、御風ぼうについては全く存じあげなかったわけです。

戦後昭和25年に、諸先輩の努力が稔り、わが国にはじめて港湾法が制定され、法的に一応港湾に対する具体的な体勢が整ったわけです。以来港湾法に関連する政省令の制定、或いは又わが国の経済社会の進展に対応するための法令の整備等が進められて来たわけです。たしか10年ほど前に、突然矢野先生が役所に見えられ、今度日本港湾経済学会を造りたいので、行政当局である港湾局でも応援してほしいとの御話があり、これが機縁になりまして、先生の御講演と御指導を直接頂く様になりました。

勿論日本港湾経済学会が今日の隆昌を見るに至った陰には、独り矢野先生のみならず、同学の諸先生の力が結集されての事であることは言うまでもないことですが、先生の御学識と御人柄が、あづかって力のあったことは否めないと思われまます。

それ以来、私が港湾局計画課長、技術参事官、第三港湾建設局長、或いは港湾局長と歴任中、折にふれ如何にも村夫子然として、身辺を飾らない先生の御姿を私の事務室で拜見するようになり、学会の事など何かといつも変らぬ、静かな口調で如何にも楽しそうに御話して行かれたのが今でも眼前に浮んで参ります。

私が港湾行政に勤務した当初にはじめて教えを受け、又官界生活の最後の時に矢野先生の思い出を、拙い文章で綴るのも何かの御縁かと思われまして、私自身、今後益々わが国の港湾のため、更に又広く世界の港湾のために何らかの御役に立つことが出来れば、これが先生に対する最大の供養となることと思ひ、一層の精進を御ちかい申上げる所であります。

---

## 故矢野会長を憶う

柴 田 銀 次 郎

わが国港湾論の先覚者である矢野先生を失ったことは本学会にとってまことに痛悼の念に堪えない。故先生は齡八十を超えられていたとはいえ最後まで五官健全であつて、逝くなられた昨年の春の常任理事会にも出席され細かい点での指示、意見も元氣よく開陳されておられた。平素学会の用事以外は殆ど文通することのなかつた私には

先生の死は突然のように感ぜられた。

先生と親しくなったのは昭和37年に日本港湾経済学会を設立したときからである。先生と私とが設立代表者として多くの同志の協力のもとに学会を発足させた経緯と苦心とは忘れられないことであり、先生も恐らく終生の思い出であったことと察せられる。正会員58名、賛助会員14社から発足した本学会が、先生が逝くなられた時には245名、43社となって凡そ4倍の伸長を見るに至っている。これは正に総会、部会を重ねる毎に会員諸氏の価値高き研究発表がいや増しに社会的に認められたことに基因するものであるが、又故矢野会長の本学会に対する並々ならぬ情熱と大なる包容力とに負うところが大きいことも否むことができない。

先生とは公の場以外では接触する機会を持たなかったが、戦前の著書「商港論」、学会設立後の学会誌上に掲載された多くの論文を通してほぼ先生の人柄を覗うことができる。いずれも事実を記すに極めて忠実であり、苟も推測に走ったり異評を立てるということがない。港湾経済はいわば戦後新興の研究部門であり、経済関係の諸学会を通じても実際界との接点においても、従前に比し割合にはでな存在となったけれども、先生の活動は飽くまで地味であり、公の会議に出席して発表することも少く、各所で講演するというのも余りなかったように覚えている。それにも拘わらず、10年に亘りわれら研究者の信頼を集め学会の東ねに成功された業績は偏に先生の高潔な人格によるものと信じている。先生の跡を継ぐものとして、つくづくその責任の重きを感じざるを得ない。茲に先生さりし日の学徳を偲び、心から先生の冥福を祈りたいと思う。

## 矢野先生と私

東 寿

昨年ヨーロッパへ旅行する前に、何か気にかかったので、病院に先生をお訪ねしたが、お疲れの御様子だったのでお目にかからずに帰った。後で考えると、無理にでもお目にかかっておくべきだったと残念に思っている。私たち港湾技術者が、港湾管理、港湾経営ないしは港湾経済に多少とも関心をもって第一に見るのが、先生の著書、論文であった。特に私は終戦直後日本港湾の将来予測を命ぜられて、「港湾計画論」を

基にして全国 400 港を対象にした大がかりな調査を行なったが、その時に先生をお訪ねしているいろん考え方について御指導を頂いた。その後私が、港全体経営を公企業とみて日本港湾の近代化体制をはかることに執念のように20数年をかけてきたのも、その時矢野先生にお会いしたのが原点であったとよいてよいと思う。その後も度々港湾局に來られて、その度に御指導を頂いたことは忘れられない。

私はその頃右腎摘出によって10数年の余命を言い渡されていて、せめて何かお役に立つことをと、港湾計画、港湾技術研究、直轄事業管理、港湾経営の4部門の方法論を学体系化することに一心となっていた。前3者の方向づけは一応できたが、港湾経営部門は進まず、ややあせりを感じていた。たまたま同志相よってつくっていた横浜での港湾懇談会で、港湾経済学会をつくり経済の先生方に港湾経済の研究をお願いすることを提案したところ、思いもかけずまさにアツという間に日本港湾経済学会の設立となり、矢野会長、柴田副会長のもとに既に10年を経て会員も300名になんなんとしている。その間先生は、度々運輸省に港全体経営の近代化体制の経常的研究の必要と、日本港湾経済学会と日本港湾協会との中間組織として港湾経済研究所の設立を主張されていた。たまたま昨年初め頃になって関係者の間にその問題意識が高まり、港湾局、港湾協会、学会等の有志の協議により、去る6月23日「埠頭経営研究会」なる任意団体の設立発起人会が開かれ、先生の御主張の一端が具現されることとなった。

これも先生御存命の時にできればよかったのであるが、今となっては、先生の御霊前にこのことを報告し、先生の御遺志にそうよう、併せて生前の御指導に対し万分の一でもお答えできるよう努力することをお誓いしたいと思っている。

## 想 い 出

麻 生 平 八 郎

### 1. 矢野さんの人柄

矢野さんとは随分長いつき合いであったが、ついぞ深いつき合いとでもいうべき事態には入らなかった。たとえば会合などの帰りに一緒に酒を飲むとか、コーヒーでも飲む為にどこかの店に入るとかというようなこともなかった。何時も漂然と来り漂

然と話し、また漂然と別れたように思う。矢野さんが病気だということを聞いたのも、多分、虎の門の研究会であったかと思う。今度は大分重体だということを幹事の方から耳にしたが、それでも間もなく癒って、漂然と次の研究会などの会合には出席するかも知れないと思ったりなどしていたものである。併し今度は事實は全く違っていた。幽明境を異にしていたのである。

矢野さんは人間の質が、私とは全く違っていたようである。もっとも私より10年か15年位長老であったと思うが、同時に長者の風格をも兼ねていたと見られる。何時も会合などの別れ際に、また、電車などの別れ際に強く感じた。というのはその別れの寸前に重要な事などを話し合っていて、もうすこし話しを詰めて置き度いと思うが次に別れの駅に来た時などは、そのままあっさり別れて了うことが多かったからである。それ故に矢野さんとお別れの後では、「淡きこと水の如し」という言葉を何時も想い出していたのである。これは同時に長者の風格でもあると思う。何時も人情的で同時に他人を上立ててくれた。生れながらに長者の風格が具っていたのであろう。

## 2. 港湾と矢野さん

矢野さんは大学を出ると海事協会のような処に勤務することとなり、其後、生涯に亘って港湾研究に当ることと関係するようになったのではないだろうか。矢野さんの仕事は戦前、戦中、戦後に至っているが、私は戦後の或る時期に偶然に逢った。多分、交通学会の会合の場か早大の教員室の一隅でかのいづれかであろう。

矢野さんの著書「商港論」は、早くから私の大学の研究室の一隅に置かれてあったが、ついに私は一度も通読せずに過ぎて了った。必要の時に必要な場所を見る事はあっても全体を読み通すことはなかった。それ程、私には未だ必要性がなかったからであるが、併しそのようなものを早くから着手していたことに心から敬意を表せざるを得ないのである。また、私には研究室の一隅に置かれてある書物を見る度に、この著者はどんな人であろうかと時々考える人々が数人いる訳であるが、矢野さんはその一人であった。後に偶然又矢野さんを知るようになった時の感じは、既知の感じであったと思う。

港湾学会が成立し、スタートしてからも、矢野さんは他の教子の方々と共に仲々積極的に動いていたようである。私はこの時にも随分若々しい人だなーと矢野さんを感

じたことが幾度かあったことを想い出す。この時には若々しく、且つ強靱という印象が強かった。この印象は現在も未だもち続けている。だから私の矢野さんのイメージは、若々しい強靱な性格を内包していて、長者の風格をも具備し、淡々たる生活と世渡りとをしている人だということなる。私の囲りには何人かこんな条件の人々がいるが、何時も敬意と愛情とを捧げている次第である。

今迄は何時も多忙のうちに時を過していたが、最近漸く自分の時をもつようになって矢野さんの梯を偲ぶ事が出来たのは何よも幸である。今日も昼食の時に、ストの為に港が船舶で一杯になっている事を話し合い、古川氏の海事文化研究所でこの雑文を草したのである。矢野さんが何処かで笑っているように思う。

## 学会創立のころ

高見玄一郎

私が矢野先生にはじめてお目にかかったのは、1962年の夏、日本港湾経済学会が誕生する少し前のことである。

当時学会創立の準備中であって、横浜四大学連合学会から全国に呼びかけたのであるが、このとき四大学連合学会を代表して色々とお骨折をいただいたのは国大の越村信三郎先生、市大の早瀬利雄先生、関東学院大学の伊坂市助先生、神奈川大学の岡野鑑喜先生であった。それに運輸省の東寿先生もしばしば会合に出席されて御指導をいただいた。私が会則案を起草し名称を日本港湾経済学会としたのは、港湾の研究を商学分野から経済学分野に発展させること、つまり事実の記述や解説から転じて、港湾における経済法則の探求を通じて、その必然的形態ないしは発展の方向を研究するという考えであった。この考え方は越村先生などから強力な支持をいただいた。

さてそこで、会長をだれにするかということで、伊坂先生から矢野先生が推せんされた。矢野先生は、人も知るように、戦前つとに商港論をあらわされた、港湾研究の先駆者である。この会長人事にはだれも異論がなく、副会長に神戸大学の柴田銀次郎先生を推すことも、満場一致でできた。当時全国の大学を見まわして、誰に呼びかけるべきであるとか、誰を役員にするとか色々の人事をきめるうえから、伊坂先生の発意が非常に珍重された。われわれはこれを「伊坂メモ」と呼んでいたほどである。

関西の方の先生方の勧誘は伊坂先生から柴田先生にお願いして、柴田先生の御尽力でまとまったのであるが、この人事をわれわれは「柴田メモ」と呼んでいた。

全会一致で、会長人事がきまったので、次に矢野先生に会長をお願いにゆく大任を私がおおせつかった。もとより、前もって伊坂先生から連絡があつてのことであるが当時矢野先生は、早稲田大学を引かれて閑日月の御生活であった。お目にかかったのは、たしか今の日本海事新聞社の2階であつたと思う。

「ちょっと待って下さい」

と、たくさんの新聞の切抜やら資料をかたずけて、近くの喫茶店に行つて、ミルクコーヒーをごちそうになった。その後もしばしば、人事のことやら創立総会の連絡やらでお訪ねしたが、いつもミルクコーヒーをごちそうになった。先生は、きっとこれがお好きだったにちがいないと思うのであるが、いかにも庶民的で好感の持てる応待であつた。

会則案など、ちくいち御説明すると、別に意見を述べられるでもなく、ふん、ふんとうなずいて居られたが、すべてを設立準備にあたつておられる先生がたの意見にまかせるといふ態度であつた。しかし、学会の創立ということは非常によろこばれて、「私の最後の御奉公」といわれ会長も引受てていただいた。そして

「遂に学会が出来ますか」

と、いかにも感慨深げであつた。特に経済学の分野へ、研究を引きあげようという趣旨には大きなよろこびと関心を示された。学会の年報の創刊号の先生の序文にも、先ずこのことが第一に強調されている。

それから、ほんのしばらくの間であるが私が初代の事務局長をお引受けした。しかし私のところでは手不足であるし、学会の事務局は大学に置いた方が何かにつけて便利であるというので、事務局長を伊坂先生にバトンタッチして、事務局を関東学院大学に移したが、この間親しく会長に接する機会が多かつた。その人となりがいかにも温厚で素朴であり、日頃から先輩として尊敬の念をいだかずにはいられたのである。何とかして学会に百万円くらいの資金がほしいということを先生から何回となく聞かされた。

「そうすると若い先生がたに、研究資金を、十分といわないまでも、さしあげるこ  
とができる」

と口ぐせのように云つておられた。

学会創立直後、私は生産性本部の郷司浩平さんから海外の港湾視察団をつくることをたのまれ、これには伊坂先生も参加されたのであるが、私としては、最初の海外港湾の研究の旅行であった。このとき、日本に港湾経済学会が出来たのだから、大いに海外にもPRしようというのが、矢野先生の発案であった。英文の簡単なパンフレットをつくり、その左肩に、矢野先生若かりしころの、早稲田大学教授のガウンをまとった写真を入れた。この写真は先生のお気に入りのものであったらしく、

「どうです」

といかにも、うれしそうであった。私はこのパンフレットを持ってヨーロッパ各地のポートオーソリテイに配ったが、後でロンドンのポートオーソリテイから便りがあったと、よろこんで居られたた。

私たち一行はヨーロッパでわかれて、私と原田港湾作業の大森専務と二人は、アメリカを弥次喜多旅行した。このときたまたまニューオルリーズズの港湾局が用意してくれたボートの上で、カリフォルニア大学の経済地理の教授が学生をつれて研究旅行に来ているのと同船することになった。この教授の名前は、何といったか、ついに忘れてしまったが、例の学会のパンフレットが2、3部残っていたので、日本にこんな学会が出来たのですよと手渡すと、さっそく矢野先生のポートレートが目についたとみえて、これは誰ですかという。

「早稲田大学のプロフェッサー・ヤノです」

「めずらしい学会ですね」

「世界にも多分ほかには無いでしょう」

「港湾の重要性を日本の学者が最初に自覚したというわけですか」

そんな会話を交えながら、夕陽のミシシッピーの流れの上で、この米国のプロフェッサーと二人で矢野先生の面影を見つめていたことが、昨日のように思い出されるのである。

矢野先生の御葬式の日、暑い日であった。北見先生が学会の弔辞を私に読めといわれたが、旅先からかけつけたままの平服で、礼装した皆さんの前に出るのは失礼であるし、北見先生が祭壇にのぼって読まれたが、この弔辞を聞きながら、在りし日の先生の笑顔とこの十年間の年月が走馬灯のように思い出されてならなかったのである。

## 矢野剛先生を偲ぶ

納賀 顯 豊

大正の末期から昭和のはじめにかけての船会社の新入社員必読の書は、高野進氏の「海運論」と矢野剛先生の「船荷証券論」であった。赤い表紙のこの二冊の本は、古い海運人にとっては、昔懐かしいものといえよう。

一度、矢野先生にお目にかかりたいと思いながらも、ついに、その機会に恵まれず20年もの歳月は流れ去ってしまった。しかし、昭和21年、海事振興会に出向を命ぜられた私は、幸運にも、そこで矢野先生とご一緒になり、約半年の間、親しく先生のご声咳に接するの機会を得、その後の長いおつき合いがはじまった。また、当事の海事振興会には、加地照義先生もおられた。

正直なところ、新潟臨港海陸運送(株)で実際に港湾事業に関係し、港湾というものを肌で感じるまでは、矢野先生が港湾学の創設者であり、名著「商港論」を現わされた泰斗であったことも存じあげなかった。

実際に港湾事業に関係するようになり、日本港湾経済学会に入会したのも、矢野先生のご推挙によるものであった。そして、それから、なにかと愚問の連発で、先生を悩ませたものである。時には、駄文、駄稿をお目にかけてこともあったが、その都度、お忙しいにもかかわらず、適切なご指摘とご懇切なるご指導、アドバイスを載いた。港湾というものについてはズブの素人であった私が、港湾に興味を抱き、多少なりともその知識を持つようになったのは、偏えに、矢野先生のご指導の賜物と感謝している次第である。

是非一度、裏日本の新潟で日本港湾経済学会の大会を持ちたいとの矢野先生のご希望により、微力ながら、私もお手伝い申上げ、新潟地震の爪跡もようやく癒えた昭和40年の秋目出度く開会の運びとなった。丁度、その時、不幸にも私は病魔に冒され、大会には出席できなかったが、「大会は非常に盛会だったよ」との先生のお話を承わり、少しでも、先生のお役に立ててよかった、と安堵のむねをなでおろした。というのもいまは、昔の物語り。

ポート・オーソリティー、貸借対照表による港湾経営、あるいは哲学、人生問題等

々、話題は幅広く、多岐にわたり、お年とも思えぬほどの若々しい情熱をもって語られ、私の駄問、愚問にも微笑をたたえながら答えられた矢野先生の温容は、昨日、今日のできごとのように彷彿として眼前に浮んでくる。晩年は、お目が悪く、読書にも親しめないとお話であったが流石は港湾学の泰斗、大所、高所より把握された大乗的なご意見には、老大家の貫録が滲み出で、示唆されるが多かった。

海事振興会の不祥事件にも敢然として立ち向われたように、矢野先生のお人柄は、温容の中にも清廉、潔白、毅然たるものがあつた。日本港湾経済学会の今日の隆盛は先生のお人柄によって導かれたものと確信する。

お名前を存じ上げてから約50年、親しくご声咳に接してからも約30年、思えば矢野先生と私のおつきあひも長いものであつた。日本郵船にご勤務のご経験もあり、また海事振興会にもご関係があつただけに、私にとっては、学界の仁というよりは、むしろ業界の知己、大先輩としての親近感の方がつよかつた。もっと、もっと長生きして頂きたかつた。そして、なお一層のご指導にも頂かりたかつた。ご寿命とはいへ、痛惜にたえない。

いまは亡き矢野剛先生の温容を偲び、謹んでご冥福を祈りたい。

## 故矢野先生を悼む

前 田 義 信

矢野剛先生が逝去されたことを知ったとき悲しい気持がした。先生と直接お会いできたのはもう20年ぐらゐ前で日本交通学会の大会であつた。私は当時すでに先生が「船荷証券の研究」や「商港論」の著者であること知つていたし、とくに「商港論」については日本だけでなく外国にも数少ない研究書の一つであつたから、先生の御名前が強く印象に残つていた。20年前といへば私はようやく海運の研究を始めたばかりで、学会の末席につらなる若輩の身であり、海運・港湾の法律・経済の大家であられた矢野先生にお会いしたときは緊張した。しかし先生は静かなやさしい口調で話をして下さつた。これから海運論の研究を始めようとする私にとって、矢野先生が励ましの言葉をかけて下さつたことは、大変うれしかつたし、永く私の研究の大きな励みとなつた。

先生とは、その後、港湾学会や海運学会でもお会いすることができ、学会出席の一つのたのしみとなった。先生は東京に住まわれておられたし、私は神戸に住み、たびたび親しくお目にかかれる機会もなかった。しかし、学会の大会でお会いできたときは、そんなへだたりを少しも感じなかった。大会の席上で、先生はいつも静かな、どちらかといえばひかえめな風に端然としておられた。私が御あいさつに行くと、親切に迎えて下さった。

明治と大正という年代の相違はあっても、先生は私にあなたかく接して下さった。先生は時流にとらわれず、名聞を求めず、学問に対してはきびしい人であったと思う。先生は飾らない、やさしい心情の持主でもあられ、私には古武士の面影をみることができた。

港湾学会が設立され、先生が最初の会長になられたことは、学会にとってよき航海への出発となった。日本における港湾経済の研究者も増え、立派な著書や論文も多く発表されるようになったが、先生の「商港論」は先駆的業績であったと思う。先生と最後にお会いしたのは東京での海運経済学会の大会であった。いつものように、先生のお話を聞く機会をえたが、その時、先生は国民経済の史的発展というようなことを勉強しているとも話された。先生はなくなれるまで学問に対する情熱をもやされていた。

昨年の港湾経済学会には、先生とお会いできると思っていたのしみにしていた。昭和46年の年賀状をいただいたとき、今年は先生とこんな話をしようなど思ったりした。しかし、学会には先生のお姿をみることはできなかった。

いま、ここに先生のありし日を偲び、在天の先生につたなき一文を捧げる。

先生の永遠のねむりの安らかなるうえにも安らかであることを――。

### 故矢野剛先生の逝去を悼んで

齋藤公助

故矢野先生のお亡くなりになりましたことにつきまして、衷心からお悼み申し上げます。

私が学会にお世話になりましたのは早いもので、昭和38年からになります。したが

って、それ以来8年間の故矢野先生には何かとお付き合いいただき、お世話になっておりました。

この間私の数々の先生の面影がいま脳裡にあります。最初お会いしたのは38年の東京大会のときでしたが、中でも港内の見学でランチに同乗された元気なお姿が、懐かしく思い出されます。そして、一昨年清水港でお目にかかったのが私として最後となりました。

私は先生にこれまでお付き合いを通して感じたことは、先生は古武士の風格であり同時に温か味のもったお方であった。これはやはり故人の人柄によるものであると思っております。

生前お付き合いの中で、私は先生著の「港湾経済の研究」のご本を贈られましたのも、私の数々の思い出の一つで今でも形見として大切に私の手許においております。また、先生には後輩の指導についても、ご熱心であり、さらに交通全般についてもご造詣が深く、資料収集などについても若輩ですがわずかながらお手伝い申し上げたことも研究員の一人として今は遠い思い出となっております。

いま、会長としての長い間の先生のご尽力と、これに続く諸先生方のご協力によって、港湾経済学会も立派に成長してきております。

先生、どうか安らかに眠られることを祈って私の筆をおきます。

## 矢野剛先生の思い出

今 泉 敬 忠

8月のある暑い昼下り、所用のため、南佐久間町へでかけた。適当に用事を切り上げて、久し振りに、ぶらぶらと御成門に向って歩いた。気がつくと、「ウメヤ」という喫茶店の前に来ていた。この店をご記憶の方も多いかと思うが、先生が、海事振興会におられた頃、よく連れてきていただいた店である。暑さととなつかしさが手伝って店内に入り、腰掛けて、コーヒーを注文したとき、「やあ！またせましたね」と先生が元気よく入ってこれれそうな錯覚におちいった。それ位、私の先生に対するイメージは、いつも若々しく、いつもお元気な、そして気さくな先生である。

思えば、先生に始めておめにかかったのは、私が早稲田の大学院に入った昭和30年

の事である。学部と大学院の双方を兼ねた授業で、「海運論」であったと思う。土曜日の午後というのに随分多くの学生が集まっていた。毎週毎週、熱弁を振われ、いつも時間を超過する先生の授業を、最初のうちはだまっていた私も、段々と慣れるにつれ、2~3の友人と示し合わせて、頃合いを見計って、各々、質問をして授業を打ち切る方法を考え出した。そのようなきっかけから、個人的にも先生と接触する機会を得、授業が終ると、家が同じ方向であったこともあって、よく新宿へお供したものである。というよりも、むしろ私達の方で無理にお誘いした、という方が正しいかもしれない。今にして思えば、当時すでに還暦を過ぎられた先生を、新宿西口の焼鳥屋へお連れした私達の行為も汗顔のいたりであるが、それをいやな顔一つされず、付き合って下さった先生の寛容な態度には、ただただ頭の下がる思いがする。その後「海運同盟論」、「英書海運研究」と都合3年間、お教をいただいたわけであるが、その間もその後も、方々の港へ連れて行っていただいたり、ご自宅にお招きいただいたりして、一見、四方山話のようでありながら、その中に、研究上の問題や人生の問題が織り込まれている事、実は不肖この事を後になって気付く事が多かったけれどもさすが、種々の人生経験をつまみ、巾広い活動をされた先生ならではの事であったと思う。

その後も、私の最初の職場であり、今も非常勤講師をしている関東学院には、白山先生、伊坂先生、北見先生など、先生の知己の方々が多く、しかも港湾学会の事務局があった関係で、度々おめにかかる事ができた。そしてやはり、いつも若々しく、お元気な先生であった。しかし、残念な事ながら、私自身の転勤、転居、そして数年間吹き荒れた大学紛争のために、その後はまったくおめにかかる機会がなくなってしまった。誠に申し訳けない事ながら、お亡くなりになるまで。もちろん、先生が城西大学につとめられ、ご活躍である事を北見先生などからうかがう事もあったが、この場合は、さもありません、と考え、またご病気だとうかがった時も、先生の事だから、きっとよくなられるであろうと考え続けていた。そして、訃報に接した時は、あの先生が！と一瞬信じられない気がした。誠に不肖の弟子であり、ご迷惑のかけっぱなしで終ってしまった事、自責の念にたえない。

しかし、一周忌を迎えようとする現在、私の心の中の先生は、やはり若々しく、お元気であり、私の人生もまだ長い、その間、自分として先生のご期待に答えられるよう、できる限りの努力をしたいものである。

## 両年次大会（大阪、清水）の矢野剛先生と私

荒 木 智 種

両大会ともに終了後は、帰途をおなじくし、特に車中にての数々の体験談は耳新しく忘れられない。なかでも、わが国における「人間性経済学」といった新講座の必要性を主張なされ——港湾と公共性といったもっとも主軸となる行動コミュニケーション（精神）の核となる人間性の中味から出発したわが国港湾のありかたと複雑化した近代における社会的責任を強くお考えになられての発想でもあったようです。

いっぽう、余り御身体もすぐれたようには見うけられませんでした。がステッキをもち、大会終了の挨拶まわりをなされたお姿はまったく元気そのものの御様子でした。その間、大阪大会での昼食を地下ビルのヤング・レストラン（モダン・ジャズ）で若い者のなかにあっていたいただいた鍋熱うどんと先生の若さあふれるお話し、また清水大会の旅館にて振るまわれましたあの純情なる心意気、いづれも矢野先生のもつき帳面であつ気骨なお人柄がうかがえました。一面ソフトな感覚力はやはり米国留学時代にえた種子が浮き彫りにされたかのようでもありました。

港湾のもつ複雑な社会をとうして本学会にうちこまれた全エネルギー——若い私達にむかってアドバイスをしてくださる数々の提言のなかで、先生は私の第一回大会の発言主旨内容にもりこまれているものをよく読んでほしいものだと力説しておられた。一昨年の年報第八号「欧米のポート・オーソリティとわが国の港湾の管理問題」の論文をコントリビュートされましたことは、先生のもつ研究意欲が最後まで表出していたことを証しているものと信じてやみません。

ここに改めて先生の御冥福を祈ると共に、本紙上を借りて一編集員として今後の本学会の年報編集等の質的向上を計るよう努力する一存です。

召天のあと・さき

北 見 俊 郎

それはまだ入梅も明けやらぬ日の夕方であった。お見舞やら、横浜大会の準備のお

話などをかねて矢野先生のお宅におじゃまをし、辞そうとしていた。先生はそれを幾度も引きとめようとなされた。口にははしなかったけれど、私はそれから大学の夜間部の「礼拝」の講だんにたたねばならなかったのて心をのこしながら玄関におりた。夕暮の中であじさいの花がどこかにうかび、細い雨脚が感じられた。それでは駅まで送ろう、と言われながら浴衣がけのまま先生があとを追われてきた。私はおどろいて強力におとめしたが、それではすぐそこまでということになった。みちみち、先生は港の経営の具体的な研究をしなればならぬことを盛んに話されていた。雨脚がかわってきたので、今度はお宅までお送りしましょうと道をとってかえした。それでも話は終わらずに、また駅の方にもどったり、お宅の方にもどったりをくりかえしたが話はずきなかった。私は港のことより先生の体が心配だったし、時間もなくなってしまったので強引におわかれをして駅に急いだ。電車に息をはずませながらのりこんでも、わかれしなに、とても残念そうな顔をされていた先生が強く印象づけられ、ふと、不吉な予感におそわれた。

思えば、まだお元気だった先生とお話できたのはそれが最後だった。それからしばらくして、入院したという電話を奥さんからいただいた。

それは八月の風もない暑い日だった。すぐにでもお見舞いと思いつつもしばらくたった時だった。病室の窓を頭に、扇風機の風の中で、やせられた先生はすでにうつろな眼を空間の一点に注がれているように感じられた。もっとも、2～3年前に名古屋で眼の手術をされていたが片方は殆んどお見えにならなかったようである。入歯をはずされていたので、先生のお話しには奥さんの通訳が必要であったが、通訳なしでわかったことの中で、「もう文句をいうこともない。」「港湾の研究は経営のことを考えなければ。」という二つのことがそこでも強く印象づけられた。私はまさかとは思いつつも、また看病にお心をくだかされている奥さんとお嬢さんのお気持に胸を傷めながら、先生がボソボソと話される要旨をメモにとった。外は熱く、風一つなかった。

家にかえってから、もしものことがあってはならぬと思いつつも、すぐに学会関係の主な方たちに、先生が入院されている様子を御連絡した。私はその頃他の人たちと神津島へ島の経済と港の関係を調査にゆく準備をしていた。そして出発の前夜、「もうあぶないから」という電話を奥さんからいただいた。私は調査をあきらめようかとふと思ったが、そうすることもできず、「すぐもどりますから、がんばって下さいますように」とおこたえし、うしろ髪をひかれる思いで小船にのった。島にいても

そのことが何度か思い出されていたが、自宅にかえるなり家人に「電話があったか？」とたづねたが、ないようなので一安心した翌朝、「北見さんのかえりをまつようにいきましたよ」とつかれきった奥さんのお声を耳にした。

これはあとでおききしたことではあるが、入梅の夕暮におわかれしたあと、先生は整理箱を二つ求められ、入院に先だって、大切な書類などを整理して納め、身のまわりも片づけられ、大学や学会に寄贈する本もちゃんと指示されておかれたとの事である。入院中にも、「御見舞金などには手をつけないように、学会に寄付をするから」といわれ、最後には奥さんにむかって「長い間世話になった」と言いのこされたそうである。嗚呼――。

今年も暑い夏が訪れた。もう少しで先生の御命日になる。今になってしみじみと80年の一人の人格の召天を憶い、天上での御平安を祈らざるを得ない。私は今、あの入梅の夕暮時に、なぜもっとゆっくりお話をおききできるようにしなかったのかと悔やまれてならない。そして御生前、なぜもっと親切と誠意をお交り中につくさなかったのかと反省せざるを得ない。

20年も昔のこと、私が港湾の勉強を始めた頃、伊坂先生がわざわざ私のために一冊本を買ってきて下さった。それが矢野先生の「商港論」（18年版）であった。その後私が港湾労働のことで研究報告をした際、一人の御老人が、私の席に中腰になって笑いながら話しかけてこられた。これが矢野先生との初めての出会いであった。私はその時大変恐縮してしまったことをまだ昨日の出来ごとのように覚えている。

これは余談かも知れないが、先生が召天されて3、4か月あとに、先生御夫妻にとって最愛のお嬢さんの御主人が忽然と先生のあとを追うようになくなりました。先生の奥さんも80才をこえる御高令のはずである。幾度かいただいた奥さんのお声は悲しみに打ちかとうとされるお気持ちがあらわれていたが、それでも時には涙でお声がききとれないこともあった。今残された奥さんとお嬢さんのお二人がせめてお元気で末永く幸多き日々であることを念ずるより他はない。改めて、先生の御冥福を祈り長い間のわれわれへの御指導の多きを感謝する次第である。

## 矢 野 先 生

マサキ  
梶 幸 雄

1. 矢野先生に、はじめておめにかかったのは、昭和25年、先生がまだ50代のころ私が旧制大学の1年のときでした。私ごとで恐縮ですが、大学1年の外書ゼミで、各人任意に適当な論文を紹介し、あわせてその部門について多少でも調べた結果を報告することになっており、鉄道好きの私が、ひょんなことから「ストラスブール港」という同地の大学の教授の論文を読んだのです。読んでいくうちに、港湾そのものを知らないことには……というわけで、あれこれ模索していくうちに、先生の「商港論」という本も見ておきたいと思い、神保町界隈の古本屋をまわって、やっと入手し、開いてみると、当時の港湾の和書ではこれが最高なのではないかと感じて、早速通読したのです。そして、この本によるにわか仕込みの知識によって、ゼミで誉められたもので、次回からも、各国の港湾都市や河川交通などの論文を紹介したのです。しかも、海が好きであったことから、ゼミの調査実習で南伊豆地方を訪れたさいにも、下田港を取上げてレポートにしました。さあ、こうなると、どうしても「商港論」の著者におあいして、教えを請いたい、お礼を述べたい、という気になりましたが、著者の生死すらわかりません。生存しておられても、きっとどこかの大学の老教授で、尊大ぶっているか、爺むさい偏屈な人だろうと想像しておりました。

2. 芝田村町の海事振興会のきたないビルの屋根裏のような3階への狭くて急な木造の階段を昇りながら、「あの著者が、それに私の不躰な手紙に対しての、温かい親切な文面と、きれいな筆跡のお返事のご当人が、こんなところに……」と疑いました。それから1時間後には、「こんな立派な学究の大家が、謙虚な紳士で、はかり知れない学識と、円満で最高の良識と遠見をもった人柄の先生が、こんなところで、おまけに威張っている某調査部長の下にいるなんて、俺は学者志望はやめよう」と思ったのです。それから、さらに1時間後には、有名な「ウメヤ」という田村町のコーヒー店で、「港湾を勉強することに決めた、この先生のような方こそ、学者としてはもちろんのこと、真の教育者であり、真の人間だ……」という大きな感銘をうけたのです。

3. その後は、もう加速度的に親しくさせていただく結果になり、学問の面はもと

より、あらゆる面でご教導とご高配とを賜わり、到底ここでは表現できそうにないほど、お世話になりました。卒業論文に「工業港」「東京湾諸港」を中軸にしたもの先生のご指示によるものです。運河をかじりはじめたのも先生の御著「運河論」の影響です。先生が早大にご出講になられるようになって、先生のゼミナリス滕の諸君とも親くなりました。中西睦氏や今泉敬忠氏なども先生を介しての友人です。今私の担当講座が港湾論でないことや、気が多くて根性がないために、港湾研究一筋というわけにまゐりませず、それに、港湾と心中しようという学徒が輩出しはじめていた昨今ゆえ、もう私の務めも終わったと思い、先生とは全く正反対に、悪い若年寄に墮落しておりますが、これも天邪鬼に加わえて、北見俊郎氏の適評によるニヒリストの私の性分ゆえでしょう。先生は多くの隨筆の中の一編で、「港は人体のへそに相当する」と卓見を吐いておられますが、けだし名言。これを継承して「港は森羅万象の核である」ことの証明ができるまで執念深く港を追い、この学会を育てることが先生のご冥福を祈念する途であると思っております。

4. 先生は学問の面で開拓者創造者であり、また学界の内外を通して学閥や学科閥、旧来的意味での主従や慣例などの弊害を、結果的には完全に打破され、真実一路であるがゆえの苦勞をされてこられた方であると思えます。その生涯において、先生は人をだましたり押しつけたことが皆無であられた反面、人にだまされたり利用されたりしたことがあったようです。しかも、無から有を生じ、かつ各界の偉い先生方の多い寄合い世帯ともいべき本学会の創設成長期に、初代会長の人選にさいして、ただの一人も批判的陰口をいう者もなく先生に決定し、その後は会員各位のご案内のように名会長としてご献身下さった次第ですが、先生の「商港論」などの刊行も含めて、終始先生を援け、また先生が文字通り頼りにしておられた方、すなわち奥様のご努力とその功績を特記しなければ、と思えます。それにお嬢さまを含めてご家族と近隣地域の方がたとの垣根のない人間関係も、先生のご人徳のゆえでしょう。ただ、お孫さんに恵まれず、先生のご逝去間もなくお嬢さまのご主人もお亡くなりになられ、重ねてのご不幸、末筆ながら、先生の御霊のご加護によって、奥様とお嬢さまのご長寿とご健康を衷心よりお祈り申上げる次第でございます。

---

## 矢野先生略歴

- 明治24年12月24日 大阪市に生まれる。
- 大正5年7月 早稲田大学・大学部商科卒業。
- 大正5年7月 日本郵船株式会社に入社。大阪支店・基隆支店・東京本社に勤務（大正11年8月まで）。
- 大正11年10月 アメリカ合衆国州立カリフォルニア大学に留学，交通論を研究（大正12年5月まで）。
- 大正13年5月 法政大学商業学校講師（昭和9年9月まで）。
- 大正15年11月 社団法人港湾協会に勤務（昭和9年9月まで）。
- 昭和9年10月 多聞酒造株式会社に勤務（昭和17年1月まで）。
- 昭和17年2月 財団法人日本海事振興会に勤務（昭和38年5月まで）。
- 昭和28年4月 早稲田大学商学部講師（昭和37年3月まで）。
- 昭和31年4月 早稲田大学・大学院商学研究科講師を兼任（昭和37年3月まで）。
- 昭和37年10日 本港湾経済学初代会長に就任。
- 昭和44年11月 交通文化賞授与。
- 昭和46年8月 銀盃1組下賜される。
- 昭和47年10月 社団法人日本港湾協会創立50周年に際し，港湾功労者として顕彰される。

## 主要著書

1. 船荷証券の研究 大正10年4月 文雅堂（菊版277頁）
2. 増補版船荷証券の研究 昭和2年2月 文雅堂（菊版572頁）
3. 傭船契約の研究 昭和3年2月 文雅堂（菊版696頁）
4. 小売業とチェーンストア 昭和6年1月 橋爪店（4.6版86頁）
5. 商港論 昭和6年8月 巖松堂（菊版426頁）
6. 運河論 昭和10年4月 巖松堂（菊版404頁）
7. 全訂増補版商港論 昭和18年1月 二里木書店（菊版602頁）
8. 港湾企業経営主体の自由化「海運叢書」第5巻 昭和36年9月 海運研究所（B6版33頁）
9. 港湾経済の研究 昭和39年11月 日本港湾協会（B6版180頁）
10. 社団法人船舶改善協会事業史（山本幸男氏と共編）昭和18年1月 日本港湾協会（菊版501頁）

（その他，論文，資料等110余編，書評，隨筆，等省略。詳細については，上記「港湾経済の研究」巻末ご参照。）

## 告別式学会弔辞

矢野先生，先生は今静かに，この夏の世俗を見おろしながら召天の旅に立たれます。まだ黒い黒い髪の毛を，右手で特徴あるかき方をしながら天国に旅立れます。

先生は明治24年，大阪にお生れになられ，80年に及ぶこの地上のお務めを見事に果

されました。とくにその御生涯を港湾の研究に注がれ、数多くの足跡を残されました。あらためて申しあげるまでもなく10冊に余る著書と100余編に亘る論文の数々、そして又受賞された交通文化賞は、わが国における港湾経済論の先駆であると共に、新しい学問分野を示す金字塔でもあります。

昭和37年、日本港湾経済学会が創設されると共に先生は初代会長として就任なされこの10年間、学会創設の困難な時期を学会発展のために心くだされました。その学会もおかげを以って、第10回の全国大会を横浜港においてこの10月開催する次第です。記念すべきこの第10回全国大会には我等会員一同は先生の御出席をいかばかり念じていたことでありましょう。もう一度御元気になられ、あのゆたかな黒い髪の毛とお年を感じさせなかった張りのあるお声をもて、記念大会の開会の辞を宣言して頂きたかったものを、嗚呼。

我等は亦多くのものを日頃の先生のプロフィールから受けております。飄飄とされたあの後姿と、いわゆる、ぶらない生活態度は多くの会員に貴重な人生への教訓を与え、多くの親しみを生んで参りました。とくに先生は研究や事業にしめる人間的要素を重視されると共に、人格の貴重さを先生御自身が示されておりました。豊かな人間味を淡淡とされた一種の無欲さが瘦軀に調和されておりました。亦先生は自らの人生を前々からよく知られており、昭和39年に出版された「港湾経済の研究」には、その自序に「著者は、昭和6年類似書のない時代に商港論を出版して以来34年間、港湾問題研究に生き甲斐を感じ、永遠の生命につながる思いを馳せて今日まで過ごしてきたが」云々と認めていられます。その深い宗教的理念と学究的理念は我等にとってもっとも貴重な指針と信ずるものであります。

我等はここに先哲の学問を、そして人格を、今一度、その軌跡をなぞられつつ改めて天にある先生の魂の平安を深く念ずる次第です。願わくは、これからも先生が我等の学会の上において、よき導きを与えられますよう祈り上げる次第です。我等も亦、先生の残されたものを引継ぎ学問研究に学会活動に力を注ぐことこそが先生のいわゆる「永遠の生命」につながるものと信じます。

矢野先生、いろいろと御世話になりました。ありがとうございます。この秋の全国大会の会場には先生の御写真をかざり、共々有意義な大会に致し度く念じております。先生の平安な旅立ちと、良き天国の港につかれますことを何よりも祈り上げま

す。僭越ですが之を以って弔辞に代えさせていただきます。

昭和46年 8月26日

日本港湾経済学会

## 学会記事

### 1. 第10回全国大会概要

第10回全国大会は、横浜市開港記念会館において、10月4日～6日にわたって開催された。第1日目の10月4日、午後1時より横浜港見学会、午後6時より理事役員会が開かれ、第2日目は、講演会のあと自由論題の報告、総会、懇親会が、さらに第3日目は共通論題ならびにシンポジュームの討論が行なわれた。

講演会は横浜市港湾局長山添鉄一氏による「横浜港の現状と将来」について行なわれ、自由論題および共通論題は下記に示すテーマと報告者を得、とくに共通論題「広域港湾と港湾経営の諸問題」をめぐる活発な討論がシンポジューム(司会、高見・柁両氏)において展開された。なお本大会は、学会創立10周年記念を意味し、とくに学会活動の中心ともいえる学会誌「港湾経済研究」No.9の特別企画による刊行(470頁)も行なわれた。また、会場の控室においては学会10年史の小展示会が、この大会を前にして他界された矢野会長の遺影と共に開かれた。総会においては新会長として柴田副会長が就任される他、理事役員の改選なども下記のように発表され、学会も創設10年より、第2段階をむかえるにいたった。なお来年度第11回大会は神戸において開催されることが決定した。

### 研究報告会プログラム

自由論題(報告・40分、質問・10分)

1. 16世紀のロンドン港一地方港との関連において……………小林 照 夫  
(関東学院大学)
2. 港湾および港湾事業の経済学的考察……………田 中 文 信  
(市邨学園短期大学)
3. カーフェリー輸送と港湾……………市 来 清 也  
(日通総合研究所)
4. 港湾運送業の直面する問題点と背景……………宮 地 光 之  
(本間船舶・株)

共通論題「広域港湾と港湾経営の諸問題」(報告30分、質問なし・質問用紙記入の上

シンポジウムにて応答)

1. 東京湾内諸港の港湾貨物量の適正化と港湾管理財政……………千須和 富士夫  
(港湾経済研究所)
2. 広域港湾における港運事業の近代化について……………山 本 長 英  
(港湾近代化促進協議会)
3. 公企業経営としての港湾問題……………東 寿  
(石川島播磨重工業㈱)
4. 港湾と港湾運送—機能拡大と変革の基礎—……………喜多村 昌次郎  
(運輸港湾産業研究室)
5. 港湾行政の近代化……………和 泉 雄 三  
(函館大学)
6. 巨大都市化と広域港湾問題……………今 野 修 平  
(運輸省港湾局)
7. 広域港湾問題の一考察……………柴 田 悦 子  
(大阪市立大学)
8. 広域港湾と港湾経営の本質的課題……………北 見 俊 郎  
(青山学院大学)

#### 理事役員改選結果

(昭和46年10月総会にて承認)

- |             |   |
|-------------|---|
| 会 長         | 柴田銀次郎   |
| 副 会 長       | 東 寿   |
| 副 会 長       | 北見 俊郎   |
| 常任理事(北 海 道) | 徳田 欣次   |
|             | (東北・関東) 喜多村昌次郎, 高見玄一郎, 柁 幸雄, 今野 修平                                |
|             | (中 部) 名古屋港管理組合(紅村文雄)  |
|             | (関西・広島) 柴田 悦子, 是常 福治  |
| 理 事(北 海 道)  | 和泉 雄三, 神代 方雅, 筒浦 明, 徳田 欣次,<br>松沢 太郎                               |
|             | (東北・関東) 東 寿, 麻生平八郎, 伊坂 市助, 奥村 武正,<br>北見 俊郎, 喜多村昌次郎, 今野 修平, 白山源三郎, |

高見玄一郎, 中西 睦, 柎 幸雄, 横浜市港湾局  
(山添鉄一), 横浜新港倉庫轉 (左右田俊夫)

(北 陸) 佐藤 元重, 新潟臨港海陸運送轉 (大久保政賢)

(中 部) 岡崎不二男, 酒井正三郎, 名古屋港管理組合 (紅村文雄)  
野村寅三郎

(関西・広島) 大阪市港湾局(叶 清), 岡庭 博  
神戸市港湾局(永田安彦), 是常 福治  
佐々木誠治, 柴田 悦子, 柴田銀次郎

(九 州) 北九州港管理組合(谷 悟平), 西原峯次郎

## 2. 理事役員会開催状況

(1) 大会時理事会 (昭和46年10月5日, 於横浜)

### I 報告事項

- (1) 矢野会長御他界の件
- (2) 第9回大会完了の件
- (3) 事業促進の件
  - A) 昭和46年度大会準備の件
  - B) 年報・名簿・資料配布の件 (詳細については年報 No.10・学会記事参照)
  - C) 部会活動の件 ( " " )
  - D) 中部部会発足の件 ( " " )
  - E) 理事改選・会則変更に関する件 ( " " )
  - F) その他

- (4) 来年度大会にともなう件
- (5) 会員増減の件 (詳細については年報 No.10・学会記事参照)
- (6) 会計事務の件 (会計報告)

### II 協議事項

- (1) 会計 (予算・決算) 承認およびその他の件
- (2) 役員改選・会則変更に関する件
- (3) 部会活動の件
- (4) 来年度大会の件
- (5) その他

## (付) 事務局要望事項

- (1) 会員の労作・動静の報告要望および労作抜刷配布の件
  - (2) 来年度「年報」原稿の件
  - (3) 新規会員推薦の件
  - (4) 会員名簿整備の件
  - (5) 来年度大会に伴う件
  - (6) その他
- (2) 常任理事会 (昭和47年4月15日, 於東京)

## I 報告事項

- (1) 昭和46年大会終了の件
- (2) 昭和47年度大会開催の件
- (3) 各部会活動状況
- (4) 年報編集の件
- (5) 昭和46年度決算報告の件

## II 協議事項

- (1) 昭和46年度決算承認の件
- (2) 昭和47年度予算案編成の件
- (3) 昭和47年度大会開催の件
- (4) 会員増減の件
- (5) 評議員委嘱の件
- (6) 昭和48年度大会の件

上記協議事項中、昭和47年度大会準備の件は適切時に開催地側および関西部会、本部事務局との会合を開くこと、また、評議員委嘱の件は、評議員の性格、組織等を検討の上、大会理事会時に原案を提出することになった。また、来年度大会開催地として名古屋港が候補としてあげられた。

## 3. 部会活動状況

## 北海道部会

北海道第3期総合開発計画の推進のなかで石狩湾新港の建設、苫小牧東部大規模工業基地の建設が具体化すると共に、北海道の在来港湾との関連、また港湾の在り方、管理運営の問題その他、港湾をめぐる論議が活発化し種々の課題が増大している。北

北海道部会も新に活発な動きを要請される段階にある。9月に総会ならびに研究会を開催、今後の具体的活動の方向ならびに研究課題を追究することとしている。

部会報「北海道港湾経済」のNo.7とNo.8を編集印刷中、この刊行をまわって具体的活動に入ることとなっている。No.7は第7回北海道大会の記念誌であるが、No.8は、後記するが逝去された上原部会長の追悼号を兼ね、下記の内容となっている。広く配布の予定でいる。

巻頭言……檜山千里

論文「石狩湾新港の開発構想について」……町田真也

「青函トンネル完成と函館港」……和泉雄三

「シベリア開発と輸送問題」……神代方雅

上原部会長追悼

「キールのスライド」—上原先生をしのんで—……北見俊郎

「上原徹三郎先生の逝去を悼む」——北海道総合開発計画と上原先生——……

松沢太郎

「上原徹三郎先生のこと」……筒浦 明

書評 寺谷武明著「日本港湾史論序説」……徳田欣次

部会記事

以上、北海道部会にとって今年の特記されることとして部会長上原徹三郎先生の逝去があった。昭和47年2月27日急性気管支肺炎のため自宅にて88才の生涯をおえられた。

港湾経済学会の発展のために高老にもかかわらず積極的な情熱をもって対応された部会幹事会は、比較的病がちとなられたこの1、2年以前は必ず定刻にお出になり、熱心に議論、ご指導されていた。部会の発展をわがことのように期待していた先生のことを思い、われわれはさらに改めて系統的な努力の必要を痛感している次第である。先生のご冥福を祈りあげたい。なお、事務局のことを記して甚々恐縮であるが、部会長逝去に伴ない、部会長代行をおき会務を行なうこととした。部会長代行は暫定的に筒浦明幹事長をお願いすることとなった。

(文責・徳田)

## 関東部会

昭和46年度の関東部会の活動は、前年に引続き会員の熱意と関係機関の御協力を得て、活発に行なわれた。

## 第1回部会

日 時 昭和46年5月29日

場 所 東京都港区芝罘平町 日本港湾協会談話室

発 表 者 山本和夫氏（東京都港湾局）

発表題目 港湾管理者の財政とその問題点

参 集 者 約25名

## 第2回部会

日 時 昭和46年9月25日

場 所 東京都港区芝罘平町 日本港湾協会談話室

発 表 者 今野修平氏（運輸省）永野為紀氏（仙台大学）

発表題目 小名浜港の発展過程と現状の問題点

発 表 者 山村学氏（京葉鉄鋼埠頭 現流通経済研究所）

発表題目 鉄鋼流通における輸送構造の変化と港湾での過程

参 集 者 約25名

## 第3回部会

日 時 昭和46年11月30日

場 所 宮城県仙台市 仙台都市会館

発 表 者 大内康三氏（宮城県港湾課）

発表題目 宮城県における港湾の現状と将来

発 表 者 北見俊郎氏（青山学院大学）

発表題目 物的流通革新と港湾の近代化

発 表 者 東 寿氏（石川島播磨重工 現東海大学）

発表題目 港湾開発を公企業としてみる

参 集 者 約75名

なお本会は宮城県港湾課創立十周年記念行事として、宮城県港湾協会と共催し、午

後石巻港・塩釜港の見学会を挙行政た。

昭和47年度からは部会集会担当が交替して山村学氏が就任、既に4月、9月、10月の3回開催している (文責 今野)

### 中部部会

中部部会は、本部の積極的な応援もあって、昨年(昭和46年)6月5日、名古屋港湾会館で設立総会をもった。会員数は個人会員65名、法人会員26社。役員構成は会長酒井正三郎(南山大学)以下、副会長1名、理事4名、幹事1名、監事2名となっている。設立準備は名古屋港管理組合の手で進められたが、設立後、事務局は名古屋市立大学内(事務局長、岡崎不二男理事)におかれている。

設立総会において、記念講演として、北見俊郎青山学院大教授による「港湾管理・経営問題と港湾の近代化」、岡崎不二男名古屋市立大教授による「名古屋港と地域経済」の二つの研究報告があったが、その後の部会活動としては、本年8月26日に、やはり名古屋港湾会館で部会総会を開催し、設立後一年間の研究成果を発表している。

中部部会は、部会運営方法として、研究プロジェクト方式をとっている。年度当初において、会員から年度の研究テーマを募り、それを理事会で検討して研究プロジェクト・チームをつくる。本年の部会での研究報告もその成果であって、報告者・名古屋市立大・岡崎不二男によって「名古屋港の外部経済効果に関する定量分析」が、また愛知学院大・石瀬隆氏によって「内外経済動向が名古屋港に及ぼす影響」が報告されている。岡崎氏の研究プロジェクトに参加したのは、同氏のほかは運輸省第5港湾建設局の大音宗昭氏と名古屋市立大・木村吉男氏、また石瀬隆氏のプロジェクトに参加したのは、愛知教育大・渡辺行郎氏、名古屋市大・松永嘉夫である。

部会総会は、出席者20名で、中部の部会としてはきわめて盛会であり、活発な研究討議がなされたが、さらに部会活動を盛り上げるため、今年度はプロジェクト数を数組以上と予定し、目下、会員諸氏からアンケートをとりつつある。(文責・松永)

## 関西部会

### (1) 昭和46年11月19日 参加者20名

阪神外貨埠頭公団によって新しく建設された神戸港ポートアイランドで、すでに営業を開始しているシーランド・ポートの見学をした。U. S. Lのコンテナ船入港予定であったのに、米国港湾ストの影響でおくれ、コンテナ船の荷役は見学出来なかったがシーランドのターミナル・オペレータの三井倉庫ポートアイランド事務所長足達氏より説明を聞いた。そのあとまや埠頭などを海上から見学、神戸市港湾局の「おおわだ丸」で岸孝雄氏の説明を聞きながら神戸市の六甲埠頭構想等、具体的な質問も出された。

見学終了後、次年度大会準備会を開いた。

### (2) 昭和47年4月8日 参加者20名

神戸商工会議所会議室で、本年度第1回目の関西部会が開かれた。

報告者とテーマは、兵庫県労働部次長武下優氏から「港湾労働の現状と問題点」、神戸商船大三木楯彦氏から「港湾情報管理システムの構想」についてそれぞれ報告を聞いた。

武下氏はさきに県労働部でまとめられた『神戸港の港湾労働』の要旨をまとめながら、今日当面している港湾労働問題を論じられた。三木氏は、神戸市港湾局情報センターから依頼された出入港船についての情報の流れの調査について、まとめられたデータをもとに報告された。具体的に情報管理システムを港湾への適用化を考えるうえで興味深い内容を持ったものであった。 (文責・柴田)

## 4. 会員の動静

### 1. 新入会員 (昭和46年度横浜大会)

#### 出会員 (39名)

課)

青山 正幸 (運輸省第5港湾建設局)

稲垣 哲 (㈱ターミナル・レポート

足立 二雄 (運輸省第5港湾建設局)

社)

比嘉 盛広 (社団法人横浜港湾福利厚

今村 邦夫 (豊栄港運K.K.)

生協会)

井本 雄太 (森本倉庫㈱)

石橋 友夫 (運輸省第5港湾建設局)

字尾野俊夫 (名古屋港管理組合)

石田 省三 (運輸省大臣官房地域計画

遠藤 博 (運輸省第5港湾建設局)

大音 宗昭 (運輸省第5港湾建設局)  
 岡崎不二男 (名古屋市立大学)  
 小合 彬生 (運輸省第5港湾建設局)  
 片山 琢朗 (運輸省第5港湾建設局)  
 金子 俊六 (運輸省第5港湾建設局)  
 栢原 英郎 (運輸省第5港湾建設局)  
 河野 博忠 (横浜国立大学)  
 岸本 勝 (運輸省第5港湾建設局)  
 小池 力 (運輸省第5港湾建設局)  
 郷原 資亮 (大阪商船三井船舶株式会  
 社)  
 木分信一郎 (横浜税関)  
 斎藤 哲朗 (運輸省第5港湾建設局)  
 坂本 武司 (運輸省第5港湾建設局)  
 柴田 暢之 (名古屋港管理組合)  
 島谷 英郎 (慶応義塾大学)  
 中川 英毅 (運輸省第5港湾建設局)

**賛助会員 (3名)**

成山堂出版K.K.  
 内外日東K.K.

**正会員 (11名) (横浜大会以降, 理事会承認済)**

高橋 拓夫 (宮城県開発公社)  
 佐藤 正夫 (東京都港湾局)  
 酢谷 俊夫 (日本海事検定協会)  
 南 正彦 (船舶整備公団)  
 前田 寛 (日本海事検定協会)  
 向島 秀峰 (監査法人中央会計事務所)  
 山内 盛弘 (財流通経済研究所)

**賛助会員 (2名)**

日本海事検定協定

武田 清吾 (神戸市港湾局摩耶ふ頭管  
 理事務所)  
 田中 省三 (日本海事検定協会神戸支  
 部)  
 富田 功 (運輸港湾産業研究室)  
 長浜 富子 (東京港運協会)  
 野田 昌義 (運輸省第5港湾建設局)  
 波多江俊孝 (福岡大学商学部)  
 原田 章三 (横浜港荷役振興K.K.)  
 船戸 幸八 (運輸省第5港湾建設局)  
 森脇 敏雄 (運輸省第5港湾建設局)  
 山上 徹 (文京学園高校)  
 斎藤圭太郎 (神戸市港湾局・神戸港情  
 報センター)  
 高橋 寛 ( " 港営課)  
 藤尾 豊一 (神戸港湾経済研究所)

日本国際輸送K.K.

西海 寛 (共進㈱神戸支店)  
 山田 源次 (㈱豊中物流センター神戸  
 事務所)  
 市川 隆夫 (東京都港湾局)  
 青塚 繁志 (長崎大学)  
 大谷 博包 (運輸省港湾技術研究所)  
 金子 彰 ( " )

日三運輸株式会社

## 2. 退会会員

(昭和46年度)

正会員 滝谷正夫

賛助会員 東海運K.K.横浜支店

(昭和47年度)

正会員 松木 猛

原田 三郎

賛助会員

住友商事株式会社社会東京支社

大阪港運事業信用保証株式会社

## 3. 物故会員

矢野 剛 (城西大学) (昭和46年8月23日)

上原徹三郎 (北海学園大学) (昭和47年2月27日)

**謹 告**

北海道部会会長上原徹三郎先生は、昭和47年2月27日、急性気管支炎のため自宅にて逝去されました。享年88才。なお告別式は3月1日北海学園葬によってとりおこなわれましたが本学会から弔意を示すと共に北海道部会各位の多数の参列がありました。ここに謹んでお知らせすると共にあらためて上原先生のご冥福を祈ると共にご遺族のご平安を念ずる次第です。

また、上原先生の追悼文およびその他については北海道部会報にて詳細のほうです。

なお、ここにあらためて弔意を示し上原先生の略歴を次に付記いたします。

上原轍三郎先生略歴

- 明治16年8月 広島県山県郡千代田町にて出世。
- 同 45年7月 東北帝国大学農科大学農業経済学科卒業，同大学助手。
- 大正3年10月 東北帝国大学農科大学助教授。
- 同 8年4月 北海道帝国大学助教授。
- 同 13年11月 欧州各国に留学。
- 昭和6年3月 北海道帝国大学教授。
- 同 9年1月 附属図書館長。
- 同 12年10月 北海道帝国大学北方文化研究室主任。
- 同 17年5月 勲2等に叙せられ瑞宝章を賜わる。
- 同 18年11月 農学博士。
- 同 20年10月 臨時北海道拓殖研究室長。
- 同 23年5月 北海道大学名誉教授。
- 同 25年3月 北海短期大学学長。
- 同 25年7月 北海開発審議会委員。
- 同 27年3月 北海学園大学学長。
- 同 31年5月 北海学園理事長。
- 同 32年12月 北海道海外協会会長。
- 同 36年8月 北海道史編集審議会委員。
- 同 39年11月 北海道文化賞を贈られる。
- 同 39年11月 私学振興功労者として銀盃1組下賜される。
- 同 43年6月 北海学園名誉園長となる。
- 同 45年9月 北海道開発功労賞を贈られる。
- 同 45年9月 プリカテイロジョーセーヒエィラコートデマガリヤンエス賞，ブルジルサンパウロ州知事。

# 「港湾経済研究」総目次

## 1. 1963年 (No.1) (部数なし)

序……………矢野 剛

### 研 究

本邦戦時港湾施策……………	矢野 剛
港湾財政の問題点……………	柴田 銀次郎
港湾設備の増強と地域開発……………	伊坂 市助
港湾における新しい労働管理の概念……………	高見 玄一郎
港湾運送業の現状……………	松本 清
衣浦港の交通……………	松浦 茂治
港湾経済の本質……………	北見 俊郎
港湾施設の与えた損害に対する船主の賠償責任と海上保険……………	今泉 敬忠

### 文献紹介

「イギリス主要港湾に関する調査委員会報告書」……………	中西 睦
「神戸港における港湾荷役経済の研究」……………	寺谷 武明

### 学会記録

## 2. 1964年 (No.2) (部数若干あり, 送料実費とも¥500) (学会事務局)

序……………矢野 剛

### 研 究

#### 共通論題 (港湾投資の諸問題)

長期経済計画における港湾投資額の推計……………	加納 治郎 (1)
摩耶ふ頭の建設と運営……………	岸 孝雄 (16)
公共投資と港湾経済……………	北見 俊郎 (28)

#### 自由論題

イギリスにおける港湾諸料金の徴集制度と問題点……………	中西 睦 (42)
ヨーロッパの石油港湾……………	浮穴 和俊 (51)
港湾労働対策への一提案……………	柴田 銀次郎 (78)
港湾労働の課題……………	河越 重任 (82)
船積み月末集中の原因とその対策……………	高村 忠也 (97)

国際コンテナの諸問題	宮野武雄	(114)
------------	------	-------

### 文献紹介

北見俊郎著「アジア経済の発展と港湾」	中西睦	(141)
北海道立総合経済研究所編「北海道の港湾荷役労働」	寺谷武明	(145)
同上「港湾労働」	北海道立総合経済研究所	(150)

### 学会記録

日本港湾経済学会会則・役員		(167)
学会記事		(171)
会員業績リスト		(175)
会員名簿		(188)

### 3. 1965年 (No. 3) (部数若干あり, 送料実費とも¥500)

序	矢野剛	
---	-----	--

### 研究

#### 共通論題 (経済発展と港湾経営)

港湾のもたらす経済的利益の分析	柴田銀次郎	(1)
港湾経営の「理念」と問題性	北見俊郎	(12)

#### 自由論題

港湾機能の地域的問題点	今野修平	(25)
国際収支における港湾経費改善のための理論的考察	中西睦	(67)
港湾資産評価とその問題点	杉沢新一	(69)

### 文献紹介

矢野剛著		
「港湾経済の研究」	寺谷武明	(84)
海運系新論集刊行会編		
「海運と港湾の新しい発展のために」	織田政夫	(90)
向井梅次著		
「港湾の管理開発」	喜多村昌次郎	(96)
喜多村昌次郎著		
「港湾労働の構造と変動」	徳田欣次	(103)
宮崎茂一著		
「港湾計画」	川崎芳一	(113)

## P. C. Omtvedt:

Report on the Profitability of Port Investments.....中西 睦 (117)

## J. Bird;

The Major Seaports of the United Kingdom.....北見 俊郎 (131)

学会記録

日本港湾経済学会会則・役員.....(131)

学会記事.....(138)

会員業績リスト.....(145)

会員名簿.....(151)

編集後記.....(164)

## 4. 1966年 (No. 4) (部数若干あり, 送料実費とも¥800)

序.....矢野 剛

研 究共通論題 (地域開発と港湾)

後進的地域開発と港湾機能.....武山 弘 (1)

港湾による地域開発問題について.....田中文信 (16)

港湾機能と経済発展.....北見 俊郎 (31)

——地域開発に関連して——

東北開発と野蒜築港.....寺谷 武明 (59)

——明治前期港湾の一事例——

神奈川県第3次総合開発計画と新しい港湾の計画理論.....高見 玄一郎 (72)

港湾における都市再開発の問題.....今野 修平 (87)

——東京港における都市再開発を例として——

自由論題

港湾労働の基調.....喜多村 昌次郎 (101)

——横浜港における労働力移動の素描——

港湾労働の近代化条件について.....徳田 欣次 (121)

港湾の最適投資基準.....是常 福治 (147)

——神戸港における測定の一例——

名古屋港発展史.....松浦 茂治 (158)

——昭和13—32年の20か年について——

港湾の物的流通費について.....中西 睦 (170)

パレット、フォークリフトの諸問題……………宮野武雄 (186)

## 資料

イギリス戦時港湾施策……………矢野剛 (195)

東京湾における広域港湾計画に対する一指針……………奥村武正  
今野修平 (206)

横浜港施設改善に関する日本損害保険協会  
からの要望について……………今泉敬忠 (216)

## 文献紹介

Colonel R. B. Oram;  
Cargo Handling and the Modern Port……………松木俊武 (220)

Charles P. Larrowe;  
Shape-up and Hiring Hall……………山本泰督 (225)

高見玄一郎著  
「港湾労務管理の実務」……………徳田欣次 (233)

松宮斌著  
「港湾の財政・経営のあり方」……………柴田悦子 (233)

横浜市港湾局編  
「横浜港における港湾労働者の実態と住宅事情」……………和泉雄三 (238)

新潟臨港海陸運送株式会社編著  
「創業六十年史」……………小林寿夫 (250)

## 学会記録

「港湾経済研究」総目次……………(279)

編集後記……………(279)

## 5. 1957年 (No.5) (部数若干あり, 送料実費とも¥500)

序……………矢野剛

## 研究

### 共通論題 (輸送の近代化と港湾)

輸送の近代化と臨港上屋の運営……………松本清 (1)

港湾業務の合理化と海運……………岡庭博 (9)

流通近代化とコンテナリゼーション……………高見玄一郎 (19)

物的流通の近代化と港湾……………斎藤公助 (30)

「輸送の近代化」と全港湾輸送体制……………北見俊郎 (48)

共通論題（日本海沿岸の港湾の諸問題）.....

- 経済開発と日本海沿岸の港湾.....佐藤元重（60）  
 新潟臨海埠頭の形成とその特性.....小林寿夫（68）  
 小樽港の現状と課題.....神代方雅（76）

自由論題

- 港湾施設利用の問題点.....今野修平（89）  
 井上洋二郎  
 港湾原単位算定における問題点.....杉沢新一（105）  
 港湾労働法の施行をめぐる諸問題.....大森秀雄（118）  
 後進島地域経済発展の転型と港湾商機能.....武山弘（128）  
 砂利類の海上輸送増大化傾向について.....棚橋貞明（143）  
 わが国における運河発達の特長.....梶原幸雄（157）

文献紹介

- 住田正二著「港湾運送と港湾管理の基礎理論」.....佐々木高志（170）  
 中西睦著「港湾流通経済の分析」.....河西稔（176）  
 港湾産業研究会編「港湾産業の発展のために」.....和泉雄三（189）  
 Docks and Harbours Act 1966.....河越重任（192）  
 V. H. Jensen; Hiring of Dock Workers.....織田政夫（198）

学会記録

- 学会記事.....(202)  
 会員業績アンケート.....(209)  
 「港湾経済研究」総目次.....(217)  
 編集後記

## 6. 1968年（No. 6）（部数若干あり，送料実費とも ¥800）

序.....矢野剛

研究

- 港湾の近代化と運送の機械化.....和泉雄三（1）  
 都市化と港湾の近代化.....今野修平（14）  
 苫小牧港における専用船の実態.....松沢太郎（30）
- ◆
- 港湾の経済的性格に関して.....柴田悦子（38）

ターミナル・オペレーションの経営的基礎……………	喜多村 昌次郎 (49)
——米国主要港との比較において——	
地方公営企業としての港湾整備事業……………	細 野 日出男 (62)
港湾とシティ・プランの基本論……………	神 代 方 雅 (74)
貨物輸送上における港湾……………	宮 野 武 雄 (86)
未来学成立の可能性……………	木 間 幸 作 (100)
——港湾論に関連づけて——	

### 文献紹介

日本港運協会編「日本港湾運送業史」……………	寺 谷 武 明 (121)
松本好雄著『コンテナの輸送実務』……………	松 岡 英 郎 (126)
喜多村昌次郎著「輸送革新と港湾」……………	玉 井 克 輔 (131)
北見俊郎著「港湾論」……………	梶 幸 雄 (145)
B. Chinitz; Freight and the Metropolis……………	武 山 弘 (149)
T. A. Smith; A Functional Analysis of the Ocean Port…	山 本 泰 督 (156)

### 学会記録

学 会 記 事……………	(163)
「港湾経済研究」総目次……………	(175)
編 果 後 記	

## 7. 1969年 (No. 7) (部数若干あり, 送料実費とも ¥800)

序……………	矢 野 剛
--------	-------

### 研 究

#### 大都市港湾の諸問題と将来

大阪港の貨物流通とその問題点……………	柴 田 悦 子 (1)
大都市港湾としての東京港の問題点……………	今 野 修 平 (20)
広域港湾論主としてオペレーションの観点から……………	高 見 玄 一郎 (36)
大都市港湾の問題点と将来……………	北 見 俊 郎 (52)

港湾運送機能合理化の考察……………	宮 地 光 之 (72)
海運流通の斉合性……………	神 代 方 雅 (82)
港湾の近代化と「制度」の問題……………	佐々木 高 志 (96)
港湾労働災害に関する責任の所在についての考察……………	玉 井 克 輔 (104)

——特に船内荷役労働について——

文献紹介

大阪市港湾局編「大阪港史」……………	寺谷武明	(120)
栗林商会労働組合編「栗林労働史」……………	喜多村昌次郎	(125)
神戸市企画局調査部編「広域港湾の開発と発展」……………	梶幸雄	(133)
港湾産業研究会編「変革期の港湾産業」……………	松橋幸一	(136)
Dipl. Ing. Gustav Haussmann; Transcontainer-Umschlag……………	荒木智種	(144)
Maritime Cargo Transportation Conference N. A. S; San Francisco Port Study……………	千須和富士夫	(148)

学会記録

学会記事……………		(157)
会員業績リスト……………		(170)
年報総目次……………		(180)
編集後記……………		(187)

## 8. 1970年 (No. 8) (成山堂・発行, 定価 1,250円, 部数あり)

## 「流通革新と埠頭経営」

序……………	矢野剛	
--------	-----	--

研究

欧米のポート・オーソリティとわが国の 港湾の管理問題……………	矢野剛	(1)
自由港の復興……………	柴田銀次郎	(22)



日本港湾におけるターミナルオペレーターの論理……………	東寿	(46)
広域港湾と埠頭経営……………	喜多村昌次郎	(71)
ターミナルオペレーションと公共性の経済的意味……………	千須和富士夫	(87)
「流通革新」と「港湾経営」の基本問題……………	北見俊郎	(105)



港湾における情報の研究……………	荒木智種	(122)
港湾労働者の供給側面について……………	篠原陽一	(133)
労務管理に見る港湾荷役企業近代化について……………	玉井克輔	(160)
港湾運送事業料金と港湾運送近代化基金について……………	山本長英	(186)

海運流通の斉合性(そのⅡ海運流通斉合の方向)……………	神代方雅	(218)
湾域高速鉄道の方向……………	浅葉尚一	(233)
穀物サイロにおける内部流動の現象と 均一排出装置について……………	桜井正	(245)

## 文献紹介

港湾産業研究会編「輸送革新と港湾産業」……………	柴田悦子	(264)
新潟県商工労働部編「港湾労働者実態調査結果報告」……………	寺谷武明	(267)
R. O. Gross; Towards an Economic Appraisal of Port Investment……………	東海林滋	(272)
National Ports Council; A Comparison of the cost of Continental and United Kingdom Ports……………	織田政夫	(279)

## 学会記録

学会記事……………		(286)
会員業績リスト……………		(303)
「港湾経済研究」総目次……………		(308)
編集後記……………		(315)

## 9. 1971年(No.9)(成山堂発行, 定価3000円部数あり)

序……………	矢野剛
--------	-----

## 研究

### (第1部)

公企業経営としての港湾問題……………	東寿	(1)
港湾と港湾運送—港湾機能拡大と変革の基礎—……………	喜多村昌次郎	(38)
広域港湾における港運事業の近代化について……………	山本長英	(56)
東京湾港湾取扱い貨物量の適正化と港湾管理問題……………	千須和富士夫	(78)
港湾広域化問題の一考察……………	柴田悦子	(104)
巨大都市化と広域港湾問題……………	今野修平	(121)
港湾行政の近代化……………	和泉雄三	(137)
広域港湾と港湾経営の本質的課題……………	北見俊郎	(157)

### (第2部)

明治時代の港湾と鉄道……………	宮野武雄	(168)
わが国における倉庫ならびに倉庫業の史的発展……………	斎藤公助	(182)

太平洋戦争下における港湾政策の意義……………	寺谷武明	(197)
港湾における賃労働と荷役業の成立と展開		
——日本港湾労働の一研究として——……………	玉井克輔	(221)
港湾の油濁損害に関する一考察……………	今泉敬忠	(239)
工業港における埠頭利用の問題点……………	今野修平 永野為紀	(261)
港湾における言論の自由……………	荒木智種	(275)

### (第 3 部)

港湾産業と鉄鋼産業 ——その系列化傾向と		
支配構造の一面について……………	山村学	(293)
北海道における工業開発と港湾の課題……………	松沢太郎	(313)
海運流通の斉合性(Ⅲ)		
——資本生産性からみた斉合性の追求——……………	神代方雅	(322)
イギリス絶対王政下にみる港湾と海運(Ⅰ)……………	長島秀夫 小林照夫	(312)

### 文献紹介

喜多村昌次郎著「港湾産業」……………	松橋幸一	(353)
北見俊郎著「港湾総論」……………	山本和夫	(358)
欧米港湾労働事情研究調査団編著「欧米の港湾」……………	市川勝一	(363)
J. Mondalshi; “Zegluga W Gospodarce Japonu, 1964”……………	山本泰督	(367)
William L. Grossman; “Ocean Freight Rates”……………	富田功	(373)
A. H. J. Bown “Port Economics”……………	山上徹	(383)

### 学会記録

学会記事……………	(389)
港湾研究文献目録……………	(405)
「港湾経済研究」総目次……………	(457)
編集後記……………	(465)

## 編 集 後 記

「十年一昔」という言葉がある。この学会誌も十才をむかえた。学会そのものは一足早く、昨年横浜にて十周年の記念大会を終えたが、学会も学会誌も柴田新会長をむかえて、新しい紀元をむかえたような気がする。

しかし創設期のこの一昔は想えば数多くの方々の努力によって支えられている。そのようなすぎ去った十年間の時のブロックのつきかさねは、単に形態的なものでなく学会や学会誌そのものの内的な発展として、時の重みがあることを念ずる。熱い夏の東京で、そしてまた寒い冬の札幌で、80才の矢野先生と88才の上原先生が天国に旅立られておいでになった。一昔という時の流れの中で、地上を旅するわれわれは、またちがった意味で絶的な時の厳肅さを感じる。

この十年間、経済成長とか輸送革新という時代的な言葉の中で日本の港湾も変りつつあり、港湾研究も一昔前からするときわめて活発化され、文献の刊行も増大してきた。この No. 10 の一つの特徴は「文献紹介」数の増大であるが、これも学会活動の一つのあらわれとみるのは「てまえみそ」であろうか。しかし、それらが決して日本の「港湾問題」の解決を意味するのではなく、いよいよ問題性の根は深く、研究のほりさが要請されるところでもある。今年度大会の共通論題「輸送システムの変革と港湾運営」もそれに応えるものとしてここに集録したが、自由論題をふくめ、その他の原稿をご多忙の中にもかかわらずおよせ下さった各位に心から感謝すると共に、新しい紀をむかえた学会にふさわしい実りある学会誌たらしめるために、これからも大方の教導を仰ぎたい。

Sept. 1972

編集委員 (A. B. C 順)

荒木智種, 北見俊郎, 玉井克輔, 柴田悦子, 山本泰督 (事務局 富田 功)

◆日本港湾経済学会のあゆみ

1962年	創立総会および第1回大会開催	(横浜港)	
1963年	第2回大会	(東京港)	共通論題 (港湾投資の諸問題)
1964年	第3回大会	(神戸港)	共通論題 (経済発展と港湾経営)
1965年	第4回大会	(名古屋港)	共通論題 (地域開発と港湾)
1966年	第5回大会	(新潟港)	共通論題 (日本海沿岸における港湾の諸問題と将来)
1967年	第6回大会	(北九州・下関港)	共通論題 (輸送の近代化と港湾)
1968年	第7回大会	(小樽・道央諸港)	共通論題 (流通体系の斉合性と港湾の近代化)
1969年	第8回大会	(大阪港)	共通論題 (大都市港湾の諸問題と将来)
1970年	第9回大会	(清水港)	共通論題 (流通革新と埠頭経営)
1971年	第10回大会	(横浜港)	共通論題 (広域港湾と港湾経営の諸問題)
1972年	第11回大会	(神戸港)	共通論題 (輸送システムの変革と港湾運営)

## 輸送システムの変革と港湾

(『港湾経済研究』No. 10)

定価 1800円

1972年10月5日印刷  
1972年10月8日発行 ©1972

編者 日本港湾経済学会  
横浜市中央区山下町279の1地先  
(横浜市山下埠頭港湾厚生センター)  
運輸港湾産業研究室気付  
日本港湾経済学会事務局  
TEL 045-651-4166 〒231

発行者 (株) 成山堂書店  
代表者 小川 實

印刷者 奥村印刷株式会社

発行所 株式会社 成山堂書店  
東京本社 東京都渋谷区富ヶ谷1-13-6 (〒151)  
電話 03-467-7474 (代) ~ 8  
振替口座 東京 78174 番

(分) 3056 (製) 24023 (出) 3819

## 港 湾 研 究 シ リ ー ズ ( 全 10 卷 )

- ① **港 湾 総 論**  
北 見 俊 郎  
シリーズの「総論」として、港湾の全貌をとらえ、これを理論と実態の二面から集大成した。社会科学的広さと手堅い論理構成によって、港湾が直面する大きな問題を理論的に分析すると共に将来のあり方をも示している。 ¥ 3800
- ② **港 湾 発 達 史**  
梶 幸 雄  
今 野 修 平  
港湾一般ならびに関連分野と本邦における種類別主要港湾の事例を通じて、港湾の存在が占める役割を解明するとともに、史的見地からの現代港湾の動向と問題点をも明確化しようと企画するものである。 近 刊
- ③ **港 湾 経 済**  
柴 田 悦 子  
港湾経済の研究は、資本主義経済、社会の全体を把握しなければならず、本書はそうした広い視角と資本主義経済、社会の法則性といった本質的問題意識によって一貫されている。 ¥ 1500
- ④ **港 湾 経 営**  
北 見 俊 郎  
山 本 和 夫  
港湾を経営体としてつかみ、その中における経営上の原則をあきらかにすると共に将来の港湾経営の原理論を構成しようとする。さらには、日本的なポート・オーソリティのための理論構成にも及ぶ予定である。 近 刊
- ⑤ **港 湾 産 業**  
喜 多 村 昌 次 郎  
港湾の経済、社会的機能を媒体として成立する港湾関係諸企業の現状をふまえながら、これら諸企業の複合体がやがて、「港湾産業として脱皮するについて、必要な諸条件を展望、し、考察したものである。 ¥ 1500
- ⑥ **港 湾 労 働**  
徳 田 欣 次  
港湾労働を取りまく諸条件と、その実態を明らかにし、その上で将来展望を行ない、近代化の道程を示唆したい。従来港湾労働の究明は6大港を中心にしたものが多いが、地方港の問題も導入。 近 刊
- ⑦ **港 湾 社 会**  
北 見 俊 郎  
荒 木 智 種  
港を人間と社会の場としてみることによって、今まで考えられていなかった世界をできるだけえがこうとしている。ジャーナリズム、情報問題をふくめ、情報化社会の港湾機能のあり方をもさぐるようとする。 近 刊
- ⑧ **港 湾 行 政**  
和 泉 雄 三  
河 越 重 任  
現代の行政が、豊かな国民生活の形成という具体的課題を担うのであれば港湾においてもかかる将来展望に立って当面する諸問題を解明することが緊要である。このような視点から、港湾行政の現状と問題点を概観する。 近 刊
- ⑨ **港 湾 と 地 域**  
梶 幸 雄  
今 野 修 平  
新しい社会経済地理学的側面から、理論的かつ実証的具体的に、現代日本の港湾の形成とその役割とを分析し解明した。理解を便にする意味から新製のものを含む多くの地図類を随所に掲載した。 近 刊
- ⑩ **港 湾 流 通**  
全 著 者 共 著  
流通の合理化を前提として、港湾が一方においてそうした要求をうけながら、一方では、要求に合う生産性を内側から求めようとする諸問題を「研究シリーズ」各巻の執筆者が、共通の問題意識によって書いた論文集である。 近 刊

## 海 運 ・ 港 湾 関 係 図 書 案 内

海事法令 シリーズ①	海 運 六 法	運輸省海運局監修	A 5 ・ 700頁 ・ 1500円
海事法令 シリーズ⑤	港 湾 六 法	運輸省港湾局監修	A 5 ・ 2500頁 ・ 2500円
	港湾運送と港湾管理の基礎理論	住 田 正 二 著	A 5 ・ 296頁 ・ 1200円
	流通革新と埠頭経営	日本港湾経済学会編	A 5 ・ 320頁 ・ 1250円
	現代港湾の諸問題	日本港湾経済学会編	A 5 ・ 472頁 ・ 3000円
	港湾運送例規集	運輸省港湾局港政課編	A 5 ・ 416頁 ・ 1800円
	港湾運送事業法論	市 川 猛 雄 著	A 5 ・ 288頁 ・ 1600円
	関 税 制 度 入 門	津 田 昇 著	A 5 ・ 240頁 ・ 980円
新訂	海 運 の 概 要	岡 庭 博 著	A 5 ・ 234頁 ・ 1200円
	ボナー法と国際海運カルテル	飯 田 秀 雄 著	A 5 ・ 200頁 ・ 500円
	海 運 論	東 海 林 滋 著	A 5 ・ 360頁 ・ 2000円
	世 界 海 運 史	黒 田 英 雄 著	A 5 ・ 364頁 ・ 1800円
	コンテナの輸送実務	松 本 好 雄 著	A 5 ・ 256頁 ・ 950円
	国際海上コンテナ輸送をめぐる12章	高 村 忠 也 編	A 5 ・ 290頁 ・ 1500円
	コンテナ輸送の理論と実際	飯 田 秀 雄 著	A 5 ・ 336頁 ・ 1500円
	コンテナ輸送の原点	飯 田 秀 雄 著	A 5 ・ 246頁 ・ 1500円
	船 荷 の 積 付 実 務	三 橋 甲 子 著	A 5 ・ 230頁 ・ 1200円
	マリーナ <small>(ヨット・モーターボート けい 留 施 設)</small>	西 田 幸 男 著	A 5 ・ 166頁 ・ 850円
	海 運 同 盟 入 門	塚 本 揆 一 著	A 5 ・ 310頁 ・ 1800円
海運実務 シリーズ①	船荷証券の実務的解説	大 木 一 男 著	A 5 ・ 246頁 ・ 950円
海運実務 シリーズ②	海上運送貨物の実務的解説 損害賠償	大 木 一 男 著	A 5 ・ 220頁 ・ 950円
海運実務 シリーズ③	用船契約の実務的解説	大 木 一 男 著	A 5 ・ 250頁 ・ 1500円